

Chaising

第二速 車嫌いの同乗者

このストーリーはフィクションであり、実際の人物や団体とは関係ありません。

カーチェイスの描写がありますが、現実で行うと重大な事故につながる恐れがあり

非常に危険です。決して真似をしないで下さい

第一速 フロントガラスの向こうの青年

第二速 180SXの行方

第三速 車嫌いの青年

第四速 港でのカーチェイス

第五速 夜の車両甲板

第六速 愛車との再会

第一速 フロントガラス越しの青年

夜道を一台のR34SKYLINEが駆け抜けていった。乗っているのは奥留（奥留）である。謎のスポーツカーとのカーチェイスから一年、この付近では暴走車両はあまり見られなくなった。この日、奥留は盗難車を追っていた。「上地（かみち）より奥留、応答願う。」上地からの無線が入った。「こちら奥留、どうぞ。」奥留が応える。盗難車の情報が入った。

「車種は黒い180SX、現在追跡中、応援を要請する、どうぞ。」上地の無線に「了解先回りして待機します。」奥留が応えた。物影に隠れてサイドミラー越しに様子を伺った。やはり窃盗団は慣れている模様、パトカーを巻いたようだ。180SXがR34SKYLINEに接近する。奥留はサイレンを付け合流地点で幅寄せをしてその車を止めようとした。と、車載センサーが鳴る。その車の横を原付が走行している事に気が付いた奥留、「仕方ねえ。」と言いながら減速し、その車の後ろに下がった。原付に乗っているのは青年のようだ。こんな遅くに原付に乗る青年、、奥留は父親である奥留郁の後を追って峠道を駆（はし）った時を思い出した。「まるでフロントガラスの向こうに昔の俺がいるようだ。」奥留は呟いた。180SXがコーナーに差し掛かった。その内側を駆っている原付が巻き込まれそうになっている。「まずい」奥留はギアを上げ、車を加速させた。斜面に乗り上げ、わざとバランスを崩して180SXの前に着地した。180SXが急ブレーキをかける。原付との接触を回避した。奥留は車から飛び降り、青年のもとに駆け寄る。180SXが急加速をしUターンした。奥留は青年を抱えて草むらに倒れ込んだ。青年を事故から守るためだ。後を追ってきた上地のパトカーをかわして180SXは駆り去った。上地に奥留は「すいません、事故か

ら守ることを最優先に考えた結果、逃がしてしまいました。」と言った。上地は「君のしたことは正しい事だ。俺たちは市民を守る使命がある。」と応えた。奥留は「もう誰かが事故で傷付くのは見たくねえ。」と誰にいうでもなく呟いた。青年が車の駆り去った方向を見て、「ワンエイティー。」と涙目で呟く。上地と奥留は「俺たちが必ず見付ける。」そう言った。青年は原付で帰って行った。奥留は足下に180SXのミニカーが落ちている事に気がつく。草むらに倒れ込んだ時に落としたのだろう。奥留は「昔の俺を見てるみてえだ。」と呟きながらミニカーを拾い上げた。

180SX

日産自動車が1999年まで製造していたクーペタイプの車。正式名称ワンハンドレフトエイティエスエックス 通称ワンエイティー

第二速 180SXの行方

翌日の朝、上地はガレージで車の点検をしていた。随分と念入りである。そこに大学へ向かう途中の佐々木（ささき）が通りかかる。「朝から車の整備ですか？」と尋ねると、「実は昨日、盗難車を逃がしたんだ。その車を追ってきた原付に乗った青年が昔の俺と重なった。

あの車を見付けてやりてえ。初めて誰かのために駆ろうと思った。まだ近くの駐車場とかに隠されている可能性が高いから探しに行く。」と応えた。佐々木は、「その車の写真をSNSに挙げれば誰か気付く人が居るかもしれません。」と言った。奥留は写真を佐々木に送った。

「誰か気付いてくれると良いけど。」と呟く。奥留は「何か情報が入ったら教えてくれ。」と言って180SXのミニカーをポケットに入れ、車に乗り込む。レバーを操作してウイングを出した。「探しに行ってくる。」そう言い残し駆り去った。防犯カメラの付いてない駐車場等を探し回るが見当たらない。「調査の目を逃れるためにどこかに隠してあるはずだ。」奥留は車を駆らせ続ける。対向車線を一台のパトカーが駆ってきた。運転していたのは上地である。絶対に見付けるぞとお互いにアイコンタクトを取り、すれ違った。だが、見付からないまま夕方になってしまった。

佐々木はSNSの投稿に誰かが気付いてくれるかを気にして大学の講義が全く頭に入らないまま1日を過ごした。夕方になり、誰も見てくれないと諦めかけた時、スマホに着信が入る。町の外れにある廃倉庫に180SXが停まって居たとの事だ。すぐに奥留に連絡した。

奥留は車を止め缶コーヒーを飲んでいた。180SXを見付けられないまま夕方になっ

てしまった。このままだと窃盗団に海外に持って行かれてしまう。焦りが募っていた。そこへ上地も表れる。「上地刑部、ワンエイティーの情報何か入りましたか？」と尋ねると、「いや、全くだ。」と返した。そこへ佐々木からの連絡が入る。町の外れの廃倉庫に180SXがある。と分かった二人はすぐさま急行した。現場に着くと、サイレン音を聞いた窃盗団が180SXで逃走を図った。「逃がさねえ。」奥留は追跡を開始した。高速道路に入り、港へ向かう模様だ。奥留が追っていると、暴走車両に阻まれた。「ルーレット族、高速道路をサーキットのように駆る集団。」奥留は舌打ちをした。

奥留が港に着いた時には180SXを載せた船が出航した後だった。「逃がしちゃった。」奥留がサイドミラーを睨む。彼が睨んだのはミラーに映っている自分自身である。と、ミラーに原付が映る。あの青年だ。奥留は事情を説明するために車を降り、青年に歩み寄った。

第三速 車嫌いの青年

青年は白永零（しらながれい）と名乗った。「白永君、すまねえワンエイティーを逃がしてしまった。」奥留が伝える。「そうですか。」と白永が肩を落とした。「君、昨日ミニカーを落としただろ？」そう言って奥留は180SXのミニカーを渡した。だが、白永の様子がおかしい。何か戸惑うような仕草を見せている。と、「車なんか嫌いだ。」と言い放ち海にミニカーを投げ捨てようとした。「やめろ。」と奥留が止めに入る。白永の勢いに押されて奥留は海に落ちた。海水にミニカーを落とさないように強く握ったまま。白永は動揺していた。そこに駆け付けたのは上地だった。「君、なんて事をしているんだ！」穏やかな上地が珍しく怒鳴る。しかし、「刑部、彼を怒鳴らないで下さい。」と奥留が止めに入った。白永は原付で港を後にした。奥留と上地もそれぞれガレージと警察署に戻った。

ガレージにずぶ濡れで帰ってきた奥留を見て佐々木は驚く。奥留は港での出来事を話した。「同じ目だ、昔の俺と。本心では車が好きでも苦し紛れに嫌いだと言っている。ミニカーを投げ捨てた姿が昔の俺と重なった。あいつの辛さが俺には分かる。だから責めたくない。本心に気付いて欲しい。だけど肝心のワンエイティーを逃がしてしまった。」ガレージには沈黙が訪れた。

白永は混乱していた。自分でも車が嫌いなのか好きなのかよく分からない。そんな中海に人を落としてしまった。気持ちの整理がつかないまま翌朝を迎えた。

翌日の夜、佐々木のSNSに通知が入る。またも窃盗団が車を盗難したそう。すぐに奥留に連絡する。奥留は車に乗り込み、「同じグループの犯行だな。今度こそにがさねえ。」と

言いながら駆りだした。追跡をしていると、サイドミラーに原付が移る。白永だと気が付いた奥留は車を止め、窓を開けた。白永は佐々木が拡散したSNSの情報を知り、窃盗団を追いかけてきたようだ。「昨日はすいませんでした。」と謝る白永に「気にするな。」と奥留は返す。「今、俺は窃盗団が盗んだ車を追っている。奴らのアジトに乗り込めば、ワンエイトイーも見付かるかもしれねえ。来るか？」と白永に訪ねる。「行きます。」白永が返した。「分かった、横乗れ。シートベルトしといてくれ。窃盗団とカーチェイスになるかもしれない。覚悟しといてくれ。」奥留は言った。白永が車に乗り込み駆り出す。白永を乗せるまでに窃盗団との間が開いてしまったようだ。峠の下の方を駆っているのが見える。奥留は峠の下の道まで飛び越した。R34SKYLINEが窃盗団に接近する。

第四速 港でのカーチェイス

窃盗団を追って高速道路に入る。ルーレット族が道を塞いでいる。R34 SKYLINEの行く手を阻んでいるようだ。と、この先トンネルの標識を見付けた奥留が「仕掛けるところが甘えな。」と笑った。「エスケープゾーンが見えたぜ。」奥留が呟く。「エスケープゾーンなんてどこに？」白永が尋ねると「上だよ。」と奥留が返した。車がトンネルに差し掛かった時にトンネルを上り始めた。そしてトンネルの天井を駆った。トンネルの出口付近で壁を下り、地面に着地した。ルーレット族を抜いて前に出た。合流地点からパトカーが合流してくる。「奥留君、ルーレット族は俺たちに任せろ！」上地が無線で言う。さらにパトカーの後ろから見覚えのあるS13 SILVIAが駆って来た。「久しぶりだないっくん。」無線の向こうから声がする。「もしかしてあなたは親父の店の常連だった、」驚く奥留に「ああそうさ、この作戦協力させてもらう。」と返した。無線越しに警報装置がキンコンとなつていく。「懐かしい音だ。」奥留は呟いた。

窃盗団を追って港にたどり着く。海上コンテナを牽引したトレーラーが行く手を阻んでくる。車の前でコンテナを切り離し進路を妨害する。奥留はそれを跳ね飛ばし、海に落とす。再び海上コンテナを牽引したトレーラーが表れる。そしてまたコンテナを手前で切り離す。奥留は「海コンを手前で切り離して妨害するつもりだな。コンテナを切り離して空じゃねえと運転手ごと海に落とすことになっちゃうからタイミングだな。」と呟いた。トレーラーを追い越した先で窃盗団の仲間が体当たりをして来た。と、奥留はクラクションを鳴らし相手を威嚇した。興奮状態の相手はスピードを上げてぶつかってくる。「相手がスピードを

上げてきますよ。」白永が言う。「このエネルギーを利用して堤防に飛び移る。奥留は車を加速させた。相手の車が体当たりをして来る。その反動で堤防に飛び移った。遮る物がない堤防、一気に加速し再び港に飛び移り相手の車に幅寄せをしながらコーナーに差し掛かる。相手の車は倉庫の壁すれすれに追い込まれブレーキを踏んだ。だが、窃盗団もこれだけでは終わらない。別の車が船への入り口を塞いだ。しかし奥留も動じない。「そんなところからじや無くて乗り込めるんだよ。」と呟くと左前輪を海の上に浮かせたままドリフとした。「タイヤが浮いてる？」白永が驚く。「荷重移動で右に車重を右に傾けた。」奥留が返す。そのまま加速し船のへりに接近した。さらに、そこから荷重を左に傾ける。ガシャンと音がして船の柵が破壊されタイヤが引っ掛かった。船の出航と共にアクセルを踏む。R34SKYLINEはFRの為、港に残った後輪で地面を蹴飛ばした勢いと船に引っ張られる勢いで船に乗り移った。

FR

フロントエンジンリアドライブの省略語、後輪駆動を意味する。

警報装置

古い年式の車には105kmを超えるとキンコンと音が鳴る警報装置が付いていた。

第五速 夜の車両甲板

力づくで船に乗り込んだR34SKYLINE船に載っていた黒いセダンの横に停めた。窃盗団に見付からない為だ。車を停めた奥留はサイレンを切り、エンジンも切った。そして、白永に「隠れろ。」と言った。二人はしゃがみ込む。窃盗団はR34SKYLINEを探していたようだが見付からず撤退していった。「もう大丈夫だ。」奥留が白永に言う。白永は窓越しに海を見ていた。「どうした？」奥留が尋ねる。「ごめんなさい海に落として。」白永は言った。「分かってるよ、苦し紛れでやったんだろ？」奥留が返す。「俺は事故で親を亡くした。それ以降車が嫌いになった。だけど大好きだった車の事が忘れられず、どうしていいか分からなくなった。人に強く当たったりもした。よく似てるよ、昔の俺と素直な所を除けばな。俺がお前なら海に落としても何とも思わなかっただろうな。俺にかけてやれる言葉があるとすれば好きな物は好きで良いって事だ。俺が人から聞いて目覚めた言葉だ。」白永は泣いていた。奥留は静かに車を降りる。彼なりの気遣いである。ボンネットに座り潮風に吹かれていた。

その頃佐々木はSNSで見た情報を伝えるべく警察署にいた。どうやら奥留が追っているのはアメリカに拠点がある窃盗団のようだ。それを聞いた上地、すぐさま誰かに電話をかけ始めた。国際電話のようだ。そして、上地はヘリを出すように指示した。「ヘリで奥留君を追いかける。一緒に来るか？」佐々木に尋ねる。「行きます。」佐々木が応える。二人を乗せたヘリが離陸した。

ボンネットに座っていた奥留、ヘリの音を聞いて顔を上げた。「警察のヘリ、上地警部か？」

奥留は呟く。「奥留君、ようやく追いついた。」耳に付けているインカムから上地の声がする。

「上地形部来てくださったんですか？」奥留が尋ねる。「ああ。」上地が応えた。すると佐々

木が「その船はアメリカに向かっています。」と言った。「調べてくれたのか？」奥留が尋ね

る。「SNSは得意なので。」佐々木が応えた。「アメリカの警察にも連絡済みだ。」上地が言

う。「ありがとうございます。」奥留が言った。「白永君を見ると、やけに昔の俺を見てる

気がして。車が好きで、でも車に対する嫌な思いがある。」奥留がぼそつと呟いた。「奥留君

にしか分からない事だな。」白永君の気持ちを俺は理解してあげることが出来ない。君の経

験は無駄じゃ無かったと思う。」上地は言った。奥留はフロントガラスの向こうの白永に目

を向ける。「俺に出来る事はワンエイティーを見付けてやる事くらいだ。頼むぜ相棒。奥留

はR34SKYLINEのボンネットに手を触れた。

第六速 愛車との再会

船が着岸した。その振動で目覚める白永、奥留は、「奴らのアジトを突き止めに行くぞ。」と白永に言い、エンジンを吹かした。窃盗団が前から車を出していく。その車に紛れ込み奥留は彼らを追った。倉庫に乗り込み二人は180SXを探す。と、奥留の背後から銃を持つた男が現れた。銃口が奥留の方を向く。その時、R34 SKYLINEのハザードランプが光る。助手席に居る白永が出しているようだ。サイドミラー越しに180SXのミニカーのリトラクタブルヘッドライトを閉めるのが見える。そして、閉まったライトの上を指さす。その直後R34 SKYLINEのリトラクタブルウイングが仕舞われた。上に乗れと言っているのか？一か八か白永を信じるしかない。奥留は仕舞われたウイングの上に飛び乗った。すると、リトラクタブルウイングが上がり始めた。この勢いを利用して奥留は跳び蹴りをして銃を蹴飛ばした。と、男が車を出してくる。「仕方ねえ、あの車を巻くぞ。」奥留は車を駆らせた。夜明け前の薄暗い道、白永の不安な心境と重なる。相手は銃を撃ってくる。しかし奥留は相手の車がR34 SKYLINEよりも車幅が大きいことを利用した。相手の車より内側を駆り、相手の車を盾にした。「こすりもしねえ。」は呟いた。そのまま前の車を風よけにしてエンジンを暖める。相手は奥留を停める為、コーナーでガソリンをまいた。しかし、「仕掛けるところがわりいんだよ。」と呟きガソリンの上を滑るようにドリフトした。上空からヘリの音が聞こえる。上地も追跡をしているようだ。奥留は上地に「次の左コーナーで仕掛けます。」と言った。「了解、相手の車のすこし前に銃を撃って失速させる。」上地は応えた。コーナーに差し掛かる。上地は上空から銃を撃った。相手が失速し、そのすきに

奥留は横に並ぶ。相手が銃を向けてきた。しかし、「引かなかったな、これはフェイントだ。」と奥留は笑った。素早く減速し、コーナーの内側に入る。そしてコーナーの内側から相手を巻くと、リトラクタブルウイングに相手の銃を引っかけそのままバックして振り払った。と、バックミラーにアメリカのパトカーが写る。奥留は彼らに対応を任せＵターンして倉庫に向かった。すれ違いざま、警察官と目が合う。「後は任せたぞ。」奥留は目で伝えた。

倉庫にはバラバラにされた180SXがあった。それを見て言葉を失う白永、谷底に落ちたR34SKYLINEを見たときの自分と重なる。「俺に任せろ。」奥留は修理に取りかかった。

どれ程時間が経っただろう。奥留が修理を完了させた頃には夕日が差し込んでいた。そこに上地がやって来る。「警察船を港に停めてある。そこまで180SXを持っていこう。」上地が言った。「警察官になりたての頃にMTのパトカー乗って以来のマニュアルだな。」上地が言った。奥留は白永に「ワンエイティーに乗れよ。」と促す。奥留は佐々木を乗せ、180SXを追って港に向かった。

港にたどり着いた四人、港では白永零の父親白永零二（しらながれいじ）が待っていた。帰ってきた愛車との再会を喜んでいるようだ。奥留は、父親が居たときの事を思い出していた。

十六歳の白永零も免許が取れるようになればワンエイティーに乗るだろう。親子で車乗りはうらやましい限りだ。そんな二人を横目に奥留は港を後にした。駆り去るR34SKY

LINEを見て白永は、「お礼が言えなかった。」と言った。「礼なんていらねえって言うと思うよ。」佐々木が返した。

数日後、奥留はいつものようにR34SKYLINEのメンテナンスをしていた。そこに上地からの出勤要請が入る。奥留は現場に急行した。奥留は今日もどこかで違反車両を追っている。

リトラクタブルヘッドライト

自動開閉式ヘッドライトの事 法律の改正により、現在の車には搭載されていない。

リトラクタブルウイング

自動開閉式ウイングの事 この小説オリジナルの装置